

限界効用理論の含意

吉澤昌恭

はじめに

I 限界効用理論

§ 1 価値は効用によって決まる

§ 2 全部効用と最終効用度（限界効用）

§ 3 最終効用度の均等

II 限界効用理論と唯物史観

§ 4 「生活が意識を規定する」

§ 5 生活と意識の交互作用

§ 6 唯物史観と限界効用理論

III 限界効用理論と労働価値説

§ 7 限界効用理論の倫理的中立性

はじめに

アダム・スミスは『諸国民の富』の第一編第四章で次のように述べている。⁽¹⁾

「注意すべきことは、価値ということばには二つの異なる意味があるということであって、それはあるときにはある特定の対象の効用を表現し、またあるときにはその特定の対象を所有することによってもたらされると

(1) 大内兵衛・松川七郎訳『諸国民の富』、岩波文庫、昭和34年—41年、第一分冊146—147頁。

ころの、他の財貨に対する購買力を表現するのである。前者を『使用価値』、後者を『交換価値』とよんでもさしつかえなからう。最大の使用価値をもつ諸物がほとんどまたはまったく交換価値をもたないばあいがあるが、その反対に、最大の交換価値をもつ諸物がほとんどまたはまったく使用価値をもたないばあいもある。水ほど有用なものはないが、それでどのような物を購入することもほとんどできないであろうし、またそれと交換にどのような物をえることもほとんどできないであろう。これに反して、ダイヤモンドはどのような使用価値もほとんどないが、それと交換にきわめて多量の財貨をしばしばえることができるであろう。」

スミスの呈示した難題は、オーストリア人のカール・メンガー、イギリス人のスタンレー・ジェヴォンズ、フランス人のレオン・ワルラスという三人の人物によって、ほとんど同時に、しかも相互に独立して提出された新しい価値の理論によって、解決可能である。〔但し、彼ら三名の先駆者としてゴッセン (H. H. Gossen) の名を挙げておくべきかもしれない。〕本稿では、ジェヴォンズの述べるところに沿って、新しい価値の理論、即ち、限界効用理論について説明することにしたい。(§ 1～§ 3) その後に、限界効用理論が持つ意味について論ずることにする。§ 4～§ 6では、限界効用理論と唯物史観は両立可能だということを示したい。しかし、限界効用理論と労働価値説は共に並び立つことが不可能である。§ 7ではこの点に簡単にふれることにしよう。

I 限界効用理論

§ 1 価値は効用によって決まる

ジェヴォンズは、『経済学の理論』(*The Theory of Political Economy*, 1871) の緒論で、「価値は全く効用によって定まる⁽²⁾」と述べている。それ

(2) 小泉信三・寺尾琢磨・永田清訳、寺尾琢磨改訳『経済学の理論』、日本経済評論社、昭和56年、1頁。

では効用とは何だろうか？同書第三章で効用の定義が与えられている。

「いやしくも快樂を生じ、または苦痛を防ぎうるものは、いかなるものでも効用を有しうる。⁽³⁾」

効用とは快樂を生じさせるか、或いは、苦痛を防ぐ能力だというわけである。しかし、こうした効用は何らかの物質に固有に備わっている内在的な性質ではない、とジェヴォンズは言う。

「効用というものは、物の質ではあるが、内在的の質ではない。それは、人間の要求に対するその関係から起こる物の状況と説く方がよい。…中略…われわれは決して絶対的にある物件は効用を持ち、他の物は持たぬと言うことはできない。⁽⁴⁾」

ある物質はある人にとっては効用を有するものであっても、他の人にとっては全く効用を持たない、ということが起り得るのである。例えば、莓の好きな人にとって莓は効用あるものであるが、莓の嫌いな人にとって莓は全く効用なきものである。また莓好きの人のみを取り上げた場合ですら、莓の全ての部分が同じ効用を持つ、と言うこともできないのである。ひと粒の莓は莓好きの人にとって大きな効用を持つものであろうが、いかに莓好きの人であろうとも、一週間も十日も莓のみを与えられ、莓以外の一切の食物を与えられないとすれば、莓がいやになることであろう。

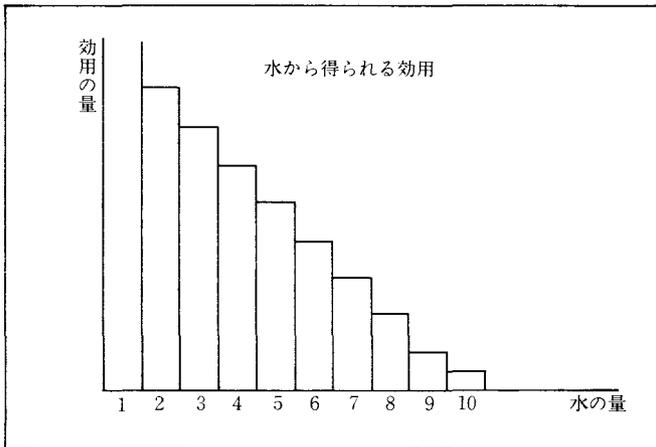
§ 2 全部効用と最終効用度（限界効用）

同じ物質であってもその全ての部分が等しい効用を持つのではない、ということが先の莓の例で明らかになった。今問題となっている物質の例を

(3) 同上、30頁。

(4) 同上、34頁。

莓から水に代えて、話を進めてゆこう。ある一人の人間にとって一日100 ccの水は、それが渇きを癒してくれるが故に、非常に高い効用を持つであろう。数リットルの水は、料理や洗濯に用い得るが故に、最初の100 ccよりも低いにしても、幾許かの効用を持つであろう。更にそれ以上になると、水から得られる効用はどんどん低下してゆく。そうすると、ある人が利用可能な水全体から生ずる「全部効用」と水の「特定部分に付着する効用」とを区別することが必要になってくる。水の最初の一単位はほとんど無限大の効用を持つであろう。それに対して、第十番目の単位の水は極くわずかの効用しか持たないであろう。



ところで人間は、種々の物質の、それぞれの時点で利用可能な量の最終単位に専ら関心を持つ存在のようである。ある人がある時点で利用可能なある物質の最終単位から得られる効用の大きさを、ジェヴォンズは「最終効用度」と呼んでいる。今日では、これは限界効用と呼ばれているものである。水の最終効用度、即ち、水の限界効用が、当該人物にとっての水の価値を決定するのである。

先にスミスによって呈示された難題は、この「最終効用度」の概念を用

いることによって、容易に解決することが可能になる。我々にとって最も有用なもののひとつである水も、それが大量に存在する限りは、その「最終効用度」は非常に低いものとならざるを得ない。それに対して、ダイヤモンドの用途はかなり限られたものではあっても、その量が非常に限られたものであるが故に、その「最終効用度」は非常に高いものとなるのである。条件次第では、両者の関係は全く逆のものとなり得る。ある豪華客船が冰山と衝突して沈没したと仮定せよ。たまたま、大金持ちの宝石商と、数本のミネラル・ウォーターを持った一人の船員とが、救命ボートに乗って最悪の事態だけは回避し得たとしよう。何日間もそのボートは発見されることなく漂流し続けた後であれば、件の大金持ちは躊躇することなくダイヤモンドとミネラル・ウォーターとを取り換えるであろう。

§ 3 最終効用度の均等

人間には、より切迫した欲望から順に満たしてゆこうとする傾向が存在する。ジェヴォンズ曰く、

「われわれはわれわれの労働と所有物とをより切迫せる欲望をまず満たすように配分する。仮に食物が不足すれば、唯一無上の問題は、いかにしてより多くを得べきかである。何となれば、その瞬間において、より多くの快樂または苦痛が他のいずれの貨物よりも食物にかかるから。しかし食物がやや豊富な場合には、その最終効用度は極めて低下し、より複雑でより飽和しやすからざる性質の諸欲望が比較的⁽⁵⁾に顕著となる。」

他方、多くの物質は幾つもの用途へ振り向けられ得るのである。

「品物の中には幾多の違った目的に使用されうるものがある。例えば、大麦はビール、火酒、パンを作るにも、あるいはまた家畜の飼料としても

(5) 同上、42頁。

使用される。砂糖は食用にも供せられ、またアルコールの製造にも用いられる。木材は建築に用いられ、また燃料としても用いられる。鉄その他の金属は、多くの異なる目的に充用されうる。⁽⁶⁾」

以上、①人間にはより切迫した欲望から順に満たしてゆこうとする傾向が存在するという事実と、②多くの物質は幾つもの用途へと振り向けられ得るという事実とから、次の如き結論が得られることになる。

「人間本性の避けることができない傾向はその瞬間において最も大きな利益を提供すると思われる進路を選ぶことである。それ故この人が自分の行なった配分に満足してそのままにいとすれば、当然それはいかなる変更も彼により多くの満足を与えるものではないと結論される。このことは結局、貨物のある増量は、1つの用途においても他の用途におけるのたまさしく同じだけの効用を生ずるということに帰着する。⁽⁷⁾」

つまり、賢明な人が種々の物質の用途を決めたならば、ある物質の種々の用途からえられる、それぞれの「最終効用度」は等しくなる（傾向がある）、というわけなのである。

II 限界効用理論と唯物史観

§ 4 「生活が意識を規定する」

マルクスとエンゲルスは、『ドイツ・イデオロギー』の一節で、青年ヘーゲル派を批判して次のように述べている。

「青年ヘーゲル派では観念、思想、概念、一般にかれらが独立化させた意識の産物が人間の本来の桎梏とみなされているが、ちょうどこのことは、

(6) 同上、45頁。

(7) 同上、46頁。

それらが旧ヘーゲル派で人間社会の真の紐帯であると宣言されているとおなじである。だから、青年ヘーゲル派はただ意識のこれらの幻想にたいしてたたかいさえすればよいことになるのは、いうまでもない。かれらの空想からいえば人間の関係、その全行動、その桎梏と制限はその意識の産物なのだから、青年ヘーゲル派が当然にも人間に課する道徳的な要請は、人間の現在の意識を人間的な、批判的な意識あるいは主我的な意識ととりかえ、それによって人間の制限をとりのぞけということになる。意識をかえよというこの要求は、つまり現存するものに別の解釈をせよ、すなわちそれを別の解釈によって承認せよという要求になる。青年ヘーゲル派のイデオロクたちはかれらのいわゆる『世界をゆるがす』言辞にもかかわらず最大の保守主義者なのだ。⁽⁸⁾」

人間の意識の産物たる観念・思想・概念といったものを攻撃するだけでは決して現実を変革することはできない、という考えをマルクスとエンゲルスは展開してゆく。彼らは、現実の諸個人・それら諸個人の行動・それら諸個人の行動によって作り出される物質的な生活条件から出発せねばならない、と主張する。人間は意識というものによって他の動物から区別される存在ではあるが、人間を他の動物から区別するのはこれのみではない。人間は自分達の生活手段を生産する、ということによっても他の動物から区別されるのである。人間がいかなるものであるかは、人間の生産のあり方によって、即ち、人間が何を生産し、いかに生産するか、によって決まってくるというのである。従って、一定の様式で生産活動に従事している人々は一定の社会的・政治的關係の中に置かれることになる。それ故に、

「経験的な観察は、それぞれ個々のばあいにおいて社会的および政治的編成と生産とのつながりを、経験的に、そしてすこしの神秘化や思弁もまじえずに呈示しなければならない。社会的編成と国家はたえず一定の個人

(8) 古在由重訳『ドイツ・イデオロギー』、岩波文庫、昭和31年、22-23頁。

たちの生活過程からうまれる。ただしこれらの個人というものは、かれら自身のあるいは他人の表象にあらわれるかもしれないような個人ではなく、現実にあるがままの、すなわち活動し物質的に生産しているままの個人であり、したがって一定の物質的な、そしてかれらの恣意から独立な制限、前提および条件のもとで活動しているままの個人である。⁽⁹⁾

かくして、実証的な科学は、人間の意識の産物についての思弁からではなく、現実的な生活の叙述から始められねばならないことになる。というのも、「意識が生活を規定するのではなく、生活が意識を規定する」⁽¹⁰⁾からである。

§ 5 生活と意識の交互作用

シュムペーターは、マルクスの歴史理論を或る種の誤解から守っておいの方がよい、として次のように述べている。

「その誤解とは、歴史の経済的解釈がしばしば唯物的解釈と呼ばれてきた点である。実はマルクス自身もそう呼んでいた。この言い方は、ある人々のあいだでは人気を高めることになったが、他の人々のあいだではかえって人気を悪くする結果に終わった。しかしかようなことはいっさい無意味である。マルクスの哲学は、ヘーゲルの哲学がそうでなかったと同じように唯物的ではなく、またマルクスの歴史理論は、経験科学の範囲内の手段で歴史過程を説明せんとするすべての試みと同様唯物的ではない。⁽¹¹⁾」

シュムペーターは、マルクスの言わんとした所を次の二命題に要約する。

(9) 同上、31頁。

(10) 同上、33頁。

(11) 中山伊知郎・東畑精一訳『資本主義・社会主義・民主主義』第三版、東洋経済新報社、昭和37年、上巻、18頁。

- 1 生産形態ないし生産条件は、社会構造の基本的決定要素であり、この社会構造はまた人間の心構えや行動やさらには文明を生み育てるものである。
- 2 生産形態そのものはそれ自身の論理をもっている。すなわち、生産形態は内的必然性によって変化し、自らの活動自体のなかにその後続形態を形成してゆく。

以上の如きシュムペーターの指摘をしっかりと心に留めておく限り、「唯物史観」という用語を用いても、その弊害はそれ程大きくはないであろう。従って、以下の部分でも、「唯物史観」という用語がより一般的なものになっているという事実から得られる利益を享受するために、この用語を用い続けることにする。

さて、マルクスの歴史理論を非常に高く評価するシュムペーターではあるが、彼はその限界をも指摘する。それはある場合には満足に作用し、他の場合には不満足にしか作用しない一つの便利な接近法以上のものではなく、そこには最初から一つの明白な制約がある、とシュムペーターは言う。

「社会構造、様式、態度は、容易に溶けない硬貨のごときものである。それらは、一度形づくられたらおそらくは数世紀間も存続するであろう。そして構造や様式の異なるにしたがってその生存能力も異なるから、現実における集団や国民の行為は、生産過程の支配的形態にもとづいて推論せんとした場合に予期されるものとは、ほとんどつねに若干の食い違いを示すことができる。⁽¹²⁾」

シュムペーターは更に次のようにも述べている。

「マルクスの図式で歴史の解釈を試みんとするさいに生ずる他の多くの

(12) 同上、20頁。

困難は、生産の領域と社会生活の他の領域とのある程度の交互作用を認めることによって解決されうるであろう。しかし歴史の経済的解釈をめぐる基本的真理の魔力は、まさにそれが主張する一面的関係の厳格さと単純さにもとづいている。⁽¹³⁾」

マルクスの熱狂的信者たることを欲しない者は、「魔力」の消滅を何ら嘆くには及ばない。生産の領域と社会生活の他の領域との、即ち、生活と意識との交互作用を容認しつつ、マルクスの「唯物史観」から多くのことを学び取りたい、と筆者自身は考えている。

§ 6 唯物史観と限界効用理論

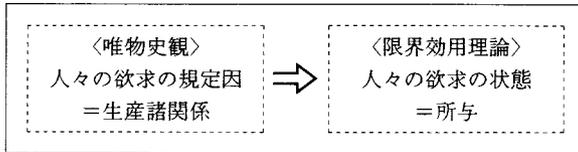
マルクスの歴史理論とマックス・ウェーバーの体系とは両立可能である、とシュムペーターは言う。

「マルクスは、宗教、形而上学、芸術の諸流派、倫理的理念および政治的意志が経済的動因に還元されうるとか、全然重要性をもたないとかいうことを主張したのではない。彼はただそれらのものに具体的形態を与え、それらの興亡を説明する経済的諸条件を暴露せんとしたにすぎない。したがってマックス・ウェーバーの述べている事実や議論の全部は、完全にマルクス体系と両立する。⁽¹⁴⁾」

ただここでは、ウェーバーの主張が唯物史観と両立可能だということではなく、限界効用理論が唯物史観と両立可能だということを示したいのである。ある時代のある地域の経済現象を分析しようとする経済学者は、その時代その地域で支配的であった人々の欲求の状態を「所与」のものとして分析を始めればよいのである。その際、限界効用理論（並びに限界生産

(13) 同上、21頁。

(14) 同上、17頁。



力理論)は、非常に有望な仮説となろう。そして、人々の欲求の状態が何故に現在のもののようにになっているか、それは将来どのように変化してゆくのか、といった問を社会学者や歴史家に託せばよいのである。

他方、社会学者や歴史家は、人々の欲求の状態や社会構造が何故に現在のもののようにになっているか、を研究しつつ、他方で、そうした社会構造の下では人々の経済活動はいかなるものになるか、また、人々の経済活動の複合的帰結として何が生じてくるか、に関して経済学者の意見を参考にすることができよう。

つまり、一方に於ける経済学者と、他方に於ける社会学者及び歴史学者とは、分業によって互いに利益を与え合うことができる存在なのである。勿論、一人の人間が両方の領域に精通することができるなら、その人の社会認識は一層深められるであろう。ただ、財やサービスの生産の領域に於いてのみならず、学問の領域に於いても分業が著しく深化した今日、そうしたことがどの程度可能なのか、かなり疑問が残ると言わざるを得ないであろう。

Ⅲ 限界効用理論と労働価値説

§ 7 限界効用理論の倫理的中立性

ウィクセルは『経済学講義』の一節で次のように述べている。

「社会主義者たちの手中において（特にロートベルトウスにおいて、さらにそれ以上にマルクスにおいて）、価値理論は、現存の秩序を攻撃する恐ろしい武器と化し、他のすべての社会批判をほとんど無用の長物にして

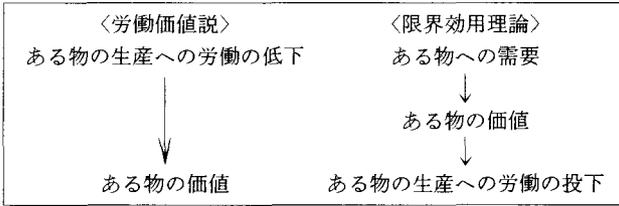
しまった。彼らは、労働が価値の唯一の創造者である、換言すると、価値の源泉である—リカードウはけっしてこのたぐいのことを意味したりいつたりはしなかったのであるが一、と考えた。だから、私人が掌中にしている〈労働以外の〉他のすべての生産要素は、生産の寄生虫のごときのものであると、そしてそれらの生産要素が受け取る報酬は、ただ独り報酬を受ける資格のある労働の犠牲のもとに略奪されたものであると、みなされることになった。…中略…これとは反対に、調和を説く経済学者たち、すなわちケアリー、バスティア、およびいろんな国々における両者への多数の追従者たちは、労働こそ富の唯一の創造者であるという原理のなかに、現存の社会秩序を弁護するためのきわめて有効な武器を発見した、と信じた。事実、彼らは、土地の地代をさえ含めて、生産物のすべての分け前を、労働の賃金に（すなわち土地や過去の生産〈=資本財〉に投じられてきた労働に対する賃金に）、還元しようと試みた。

このような議論の不条理さは明白である。…中略…**社会主義者**たちは、カール・マルクスの価値理論のなかに、調和派の経済学者たちの提供したものと同じくらいりっぱな理論的根拠が常備されていると信じていた。そして両学派共、自分たちが、古典主義の旗じるしのもとに大小ほぼ同じくらい正当な論陣を張っていると考えた。

だから、新しくかつ論拠の強化された交換価値理論〔限界効用理論のこと、吉澤註〕を樹立することは、単に抽象理論的に重要な課題であったのみならず、著しく実践的かつ社会的利害に関係する課題でもあったわけである。⁽¹⁵⁾

交換価値の理論としての労働価値説の欠陥は、既に前稿『『資本論』第一巻の推論構造』（『広島経済大学経済研究論集』、第10巻第4号）の§4～§6で示しておいたので、ここでは繰り返さない。ここでは、ただ次のことを指摘するに止めておこう。労働価値説の支持者は、労働の投下によ

(15) 橋本比登志訳『経済学講義Ⅰ』、日本経済評論社、昭和59年、121-122頁。



って価値が生み出される、と主張するが、限界効用の理論の主張する所はこれとは異なっている。何らかの財やサービスが価値を持つのは、それらのもに対する人々の需要が存在するからである。労働が投下されていないにも関わらず価値を有するものが多数存在する、ということを考えみれば、このことは明らかであろう。

さて、限界効用理論の持つ実践上の意義について少し考えてみることにしよう。労働価値説はある種の倫理的主張と結び付き易い性質のものである。「労働が価値の唯一の源である」という命題を、地代や利潤を正当化するための根拠とすることは全く不可能ではないにせよ、相当に困難な仕事である。それに対して、「労働が価値の唯一の源である」という命題を、「不労所得は排除されるべきである」という命題と結び付けることははるかに容易である。そして実際に、マルクスを初めとする多くの社会主義者はそうしたのであり、そうすることによって多くの人々を納得させ得たのである。

他方、限界効用理論には、労働価値説の持つ以上の如き性質はほとんど存在しない。限界効用理論の核心は次の三命題に要約することができる。

- 1 人間にはより切迫した欲望から順に満たしてゆこうとする傾向が存在する。
- 2 多くの物質は幾つかの用途へ振り向けることができる。
- 3 賢明な人が種々の物質の用途を決めたならば、ある物質の種々の用途から得られる、それぞれの「限界効用」は等しくなる傾向がある。

る。

以上三つの「である」命題は多くの「べき」命題と両立可能である。「不労所得の排除」を主張する者も、「所得分配の不平等こそが文明の生みの親であるが故に、所得分配の不平等は残されるべきである」と主張する者も、共に、上の三つの「である」命題を採択し得るはずである。こういった意味で、限界効用理論は、労働価値説よりも、より一層倫理的に中立的なのである。

しかし、労働価値説に基づいて何らかの「べき」命題を主張しようとする者にとって、そしてとりわけ、私有財産の廃棄を主張しようとする者にとって、限界効用理論が倫理的に中立である、とは感じられないことであろう。そうした人々にとって、限界効用理論は「資本主義下の労働者の搾取を覆い隠すもの」と映ることであろう。